

市政トピックス

日中の対応力強化を目指してー 青葉デイトタイム救急隊が誕生

4月1日に、青葉消防署で「青葉デイトタイム救急隊」の発隊式が行われました。「青葉デイトタイム救急隊」は、救急要請が多い日中の体制を強化するため、新たに創設された救急隊です。

市の令和3年の救急出場件数は5万件を超え、特に日中時間帯で多い傾向にあります。市中心部であり昼間の人口が多い青葉区に、日中の活動に特化した救急隊を配置することで、出場体制を拡充し、現場到着時間の短縮を図ります。

24時間交替勤務が基本となる救急隊において、デイトタイム救急隊は平日の午前8時半から午後5時までを勤務時間としています。



▲りりしい表情で発隊式に臨む4人の専任隊員

これにより、育児や介護といった理由から、夜間や泊まりを伴う勤務が難しかった人材を活用するなど、多様な働き方の推進も期待されます。

発隊式では、郡市長が「災害の激甚化・頻発化や、新型コロナウイルス感染症などの課題も多い中で、消防の果たす役割は大きい。市民の期待に応えるよう活躍してもらいたい」と激励しました。

隊員の1人で、3児の母でもある石堂里佳消防司令は「育児中で、24時間の交替勤務が難しかったが、こうして救急救命士の資格を役立てられることに、率直に喜びを感じています。働く母として、救急救命士として、どちらの役割も果たせるよう努めていきたい」と力強く話しました。

市では引き続き、救急要請に迅速かつ的確に対応するための取り組みを進めていきます。

市政トピックス

アートの力で地域の資源を生かすー新浜タワーが完成

4月7日、宮城野区岡田地区新浜で木造の物見台「新浜タワー」



▲宮城県産木材を使用したタワーの高さは約5メートル。内部にはらせん状の階段があり、訪れた人が自由に登れるようになっています

のお披露目会が行われました。貞山運河や松林、沿岸部の眺望を楽しめるよう考案されたこのタワーは、世界的に活躍するアーティスト川俣正氏によるアートプロジェクト「仙台インプログレス」の一環として設置されたものです。川俣氏は、これまでも東日本大震災の津波により被害を受けた東部沿岸地域で、地域の方々と交流を重ねながら、貞山運河へ続く木道や渡し船を制作。活動を通じて、震災の記憶や地域の歴史・文化を後世に伝えていくだけでなく、これらのアートが地域にぎわいを呼ぶ一助となることも目指しています。

お披露目会には、タワー制作に協力した地域の方々など80人が参加。フランス在住の川俣氏からは、「海に見えるタワーの上で、ぜひ潮風を感じてほしい」という音声メッセージが届けられました。会の終了後には、参加者がタワーに登り、見晴らしの良い眺めに感嘆の声を上げる姿が見られました。

市政トピックス

区の魅力を再発見！ガイドと巡る若林わくドキまち歩き

4月9日、若林区内を歩きながら、区の歴史や文化に触れる「若林わくドキまち歩き」が開催されました。このまち歩きは、若林区まちづくり協議会が主催する企画で、今年で5年目を迎えます。今回は14人の参加者が、地下鉄連坊駅からスタートして、新寺地区の桜の名所や7つの寺院を2時間かけて巡りました。

まち歩きでは、連坊という地名に、陸奥国分寺へ至る道に24の僧坊が連なっていたという由来があることや、新寺小路の戦前の風景などをガイドが解説。歴史の名残が感じられる界隈を歩きながら、参加者は話に聞き入り、熱心にメモを取る姿も見られました。参加者からは、「自分の住んでいるまちだが、新しい発見があった」「季節を変えてまた訪れたい」といった感想が寄せられました。



▲桜の多くがツばみの状態の中、洞林寺の桜は満開を迎えていました

市政トピックス

グラントシマウマの赤ちゃんの愛称決定

3月21日、八木山動物公園フジサキの杜で、昨年12月10日に誕生したグラントシマウマのオスの命名式が行われました。決定した愛称は「エル」。来園者から500通を超える応募があり、選考の結果、名付けられました。命名式では、選ばれた3名の命名者の方へ、名付け親の認定証と記念品が贈呈されました。

父親の愛称が「ケイ」であることから、アルファベットの「K」の次、「L」にちなんだ愛称が多く寄せられ、大らかな心と立派な体を持つ「Lサイズ」なシマウマになってほしいという願いも込められています。

エルは展示場内を元気に駆け回り、すくすくと成長しています。ぜひ会いに来て、エルの健やかな成長を今後も見守ってください。



▲生後4カ月を過ぎたエル(右)。母のアンズ(左)と一緒にいることが多い、甘えん坊な性格です

市政トピックス

ヤングケアラーの相談窓口を設置しました

市では4月1日より、ヤングケアラーへの支援として相談窓口を開設しました。ヤングケアラーとは、一般的に「本来大人が担うと想定される家事や家族の世話などを日常的に行っている子ども」とされています。窓口では、相談員が24時間365日電話で相談を受け付けるほか、メールや事前予約による面接相談も可能。保護者や関係機関からの相談にも応じます。市が令和3年12月から約1カ月間、市立学校の小学5年生・中学2年生・高校2年生を対象に行った実態調査では、回答者の約3パーセントが「世話をしている家族がいる」と回答。そのうち約7割の子どものは、悩みを相談した経験がないことも分かりました。

ヤングケアラーは、支援が必要な場合であっても、問題が表面化しにくい現状が指摘されています。子どもたちが不安や困り事を一人で抱えることがないよう、市では関係機関と連携し適切な支援につなげていきます。

ヤングケアラー相談窓口
☎0120・783・017 Eメール
kodomo@city.sendai.jp

3.11 震災文庫

東日本大震災を語り継ぐための市民図書館に設けた「3.11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりすぐりの本を、紹介します。

「6枚の壁新聞 石巻日日新聞・東日本大震災後7日間の記録」



石巻日日新聞社/編集 石巻日日新聞社/編集 角川マガジンス

「河北新報のいちばん長い日ー震災下の地元紙」



河北新報社/著 文藝春秋 刊

石巻日日新聞は1912年創刊の夕刊紙、東日本大震災によって輪転機が水没し、発行が困難な中、「電気はなくとも、紙とペンはある」と手書きの壁新聞を6日間にわたり制作し、情報のない避難所などに届け続けました。記者たちは自らも被災し、家族への想いやさまざまな不安の中で、情報を待たず、人々のためにまさに悪戦苦闘、時に残酷な光景に言葉を失い、時に多くの人々の未来に立ち向かう姿に励まされながら、ひたすら手作りで寝食を犠牲にして新聞作りを行います。その行動から私たちは大きな災害の際には食べ物も着る物も大切、さらに正しい情報や、未来に向けての動きを伝えることもまた、いかに必要かを感じることができず。